宝は一人の男から

国の宝になった糸満海人の道具たち。その多くは、もともと海人の家の片隅で忘れかけられていました。それを譲り受け、保存し、語り継ごうとする人たちがいます。その始まりは上原謙さんでした。

上原謙さんは、タクシーの運転手でした。客を乗せれば、いろいろな話が耳に入ります。海人のオジーの出稼ぎの話。オバーが頭に魚を担いで、那覇まで売り歩いた話。どこそこの海へ漁に行った、あの貝をどこで取った―。糸満の海の記憶が、多くの人の言葉で謙さんのなかに積もっていきました。

物を作るのが好きな人で、仕事の合間に、海人の道具を集め、自分でも作っていました。

小屋から、学校へ

ある日、一人の小学校の先生が客として乗ってきました。海人の文化にくわしいその人は、こう漏らしたといいます。

「糸満は海人のまちなのに、その道具がほとんど残っていない。仕方なく、絵や写真で子どもたちに教えている」。

それなら、僕が提供しましょう―。謙さんはそう話し、道具の提供を引き受けます。自宅の屋上を、トタンで囲う。これが、海人工房の始まりでした。

集めた漁具を並べ、ミーカガンなどの道具を自分の手で作る。その腕は、沖縄国際海洋博覧会での手土産づくりを任されるほど。このような活動によって、沖縄県知事から感謝状が贈られ、新聞や雑誌も謙さんを取り上げるようになりました。

学校から声がかかれば、道具を軽トラックに積んで出かけます。1時間ほどの授業。魚を捕ったら売るんだよ、売ったら食べるんだよ―。そうやって、糸満の暮らしを語りました。

一人の思いが、まちを動かした

謙さんとその道具が、新聞に載ると、興味を持った人が、次々に自宅へ集まります。謙さんと思いをともにする人の輪が次第に広がりを見せました。そのような中、仲間たちと声を上げ続け、市役所で道具を披露したことをきっかけに、きちんとした展示の場がいると、市が動きはじめました。

個人には貸せないが、法人ならば―。そう助言を受け、賛同する仲間が20人ほど集まり、2008年、特定非営利活動法人ハマスーキが誕生します。翌年の2009年には、謙さんの夢だった「糸満海人工房・資料館」が開館しました。

集めた道具は、国の宝に

2019年、謙さんが収集・保管したミーカガンとその制作具一式は、糸満市指定有形民俗文化財となりました。これら長年の功績がたたえられ、謙さんは市政施行50周年の節目に、名誉市民の一人に選ばれました。

そして、謙さんや市、そしてハマスーキが集めた道具の内、887点が国の有形民俗文化財として登録されました。

しかし、その登録を謙さん自身は知りません。2021年、海人文化を誰よりも愛して語り継いできたその人は、道具を遺して亡くなりました。

けれど、謙さんが遺したのは道具だけではありません。あの小屋から始まった資料館に、いまも道具と想いを引き継ぎ、糸満の海の記憶を語り継ぐ人たちが集っています。

▲糸満海人工房・資料館新展示収蔵庫（現・海のふるさと公園展示館）の開館1周年記念時の写真

糸満市名誉市民
上原謙（うえはらけん）さん

上原謙さん略歴

1943年	南洋ポナペ島でサバニ大工の家に生まれる。
1975年	沖縄国際海洋博覧会の土産を1000個制作。県知事より感謝状授与。
1992年	市内小学校3校へ漁撈用具を寄贈。糸満市教育委員会より感謝状授与。
2008年	NPO法人ハマスーキ設立。初代理事長に。
2009年	糸満海人工房・資料館オープン。
2014年	糸満海人工房・資料館新展示収蔵庫（現・海のふるさと公園展示館）オープン。
2019年	ミーカガン及び制作具一式が糸満市指定有形民俗文化財となる。
2021年	逝去。同年、糸満市名誉市民に選ばれる。